



それでも記念写真撮影の時は騒ぐ程元気だった。すでに午後9時頃だった。ベース・キャンプへの途中の道は言葉少なかった。疲労がどっと出てきた感じだ。その日の夕食は確か11時を過ぎていた。生木に火はつかないし、水場は前日までの好天で遠ざかる一方だ。泣きたい心境である。とにかくそうしてその日は寝むいミーティングをして終えた。翌11日は洞口に残して来たザイルや梯子を運んだ。付近偵察の日発見した新洞窟（後に銀鳳洞と命名）については他氏にゆづる。大雪溪の第Ⅰホール、ロッククライミングしたチムニー、昼食した第Ⅱホール、身も心も凍てつく様な孤独の滝上部、生物が生息していないかと調べた

裏六甲「百間滝」のワイヤ梯子トレーニング ルート0等活動を終えた今では想いはさまざまである。しかし撤収の日、ドリーネの上の木立の中に太陽が落ちる時のドラマチックな光景は今でも僕の脳裏に何故か焼き付いている。そう見えるのもきっと僕らの洞内から出て来た時の身にまとっているものとはおよそ対象的だったからか、あるいは日常起きている事象にまで美しさを再認識してのことからかも知れない。「幻の大横穴」を発見するまでは、否たとえ存在していなくても黒姫山付近は徹底的に踏査してみる価値があると僕は考えるのである。特に湯水期である8月上旬における夏期活動には積極的に参加するつもりである。

—— われ千里洞に思う ——

北 条 孝 司

8月8日、朝から暗い雲が天空をおおっている。黒姫山のあたりには、黒色のガスがその尾根を抱くようにしてかぶさっている。今日は雨だろう。

午前8時30分、肌寒い中をワイヤ梯子の第1プレートに手をかける。下の方から冷たい空気ガスになって上ってくる。プレートは氷のように冷たい。カチャッカチャッと音をたてておりてゆく。その音が洞窟の岩壁へ反響して、洞窟がすすりないているような悲しい音になる。10m程降りるとヘッドライトの明りがついていないのに気がつく。あわてて腰のスイッチに手をかけると、急にあたりが明るくなった。岩壁と梯子の間には、腐った枯木がたまって、それが異様な臭いを放っている。30m程降りただろうか、急にグラッとからだは梯子と共に半回転する。ガラガラッと梯子にひっかかっていた浮石が落ちてゆく。「落石ッ！落石ッ！」と叫びながら梯子にしがみつく。やっとのことでオーバーハングをきりぬけて下を見ると雪塊が見えた。万年雪だ。この何十万年の間、大洞窟の中に眠り、毎年我々がやってくるのを待っているかのようにその壮大な姿のまま解けずに残っている。その雪塊の上に立って67mの地上を仰ぎ見ると、いくすじもの青い光がさし込んでくる。「美しい！」過去3年にわたり、我々の先輩が、多くの若いキーパーたちが、この大洞窟に挑戦し、雪辱をのんだという。その時、彼等はどうな気持でこの光を見たであろうか。その様な感慨にひたりながら、さらに地底へ下ってゆく。

第Ⅰホールから第Ⅱホールまではチムニーの連続だ。はじめのチムニーをくぐるとそこには大雪溪が横たわっている。100m近くはあるという。地上からの青い光をうけて、その表面が波うっている。ブルスノーと彼等は呼ぶ。「きてよかった。」私はその青い雪溪を眺めてふとそんな気持になった。その大雪溪をななめによこぎる。ともするとすべり落ちそうになるのを、かるうじてくいとめ、一步、また一步と地底へ向って降りてゆく。大雪溪の最終地点になると、もう光はやってこなかった。これからは自分のヘッドライトだけがたよりだ。

2番目のチムニーに着いた。ここからは乗直降下だ。梯子もザイルもついていない。ロッククライミングで降りてゆく。3~4m位のチムニーが幾つも連続で続いている。2番目のチムニーはなんなく降りたが、3番目のチムニーの途中、足場を見つけないことができない。どうこうしているうちに手がすべった、と思うやいなや1m程下のテラスのプールの中にパシャーと背中から落ちてしまった。プールの水は驚く程冷たかった。うしろを見ると10m程の絶壁だ。背すじに冷汗がながれる。危ないところだった。やっとの思いでチムニーを過ぎると、あと第Ⅱホールまでは傾斜45度位いの坂になっている。数多くの落磐のために足場はとがった岩ばかりだ。

第Ⅱホールにも万年雪のかたまりがあった。かなり大きな雪溪だ。去年はこの第Ⅱホールには雪溪はなかったという。このホールの地下70mのところに地底の大広間があるという。ここで第Ⅲホールへおるために確保用員を待つ。

何分ぐらい待っただろうか、地底の中では時間や距離の観念がつかめない。しかし自分として

はかなり長い間待ったように思う。雪溪のために摂氏2.5度という寒さが汗でぬれた自分のからだをひやしてゆく。寒い！身体ふるえがとまらない。寒さをまぎらわすためには身体に刺激をあたえなければならない。足ふみ、腕立て伏せ、いろいろ試みるが寒さは変らなかった。

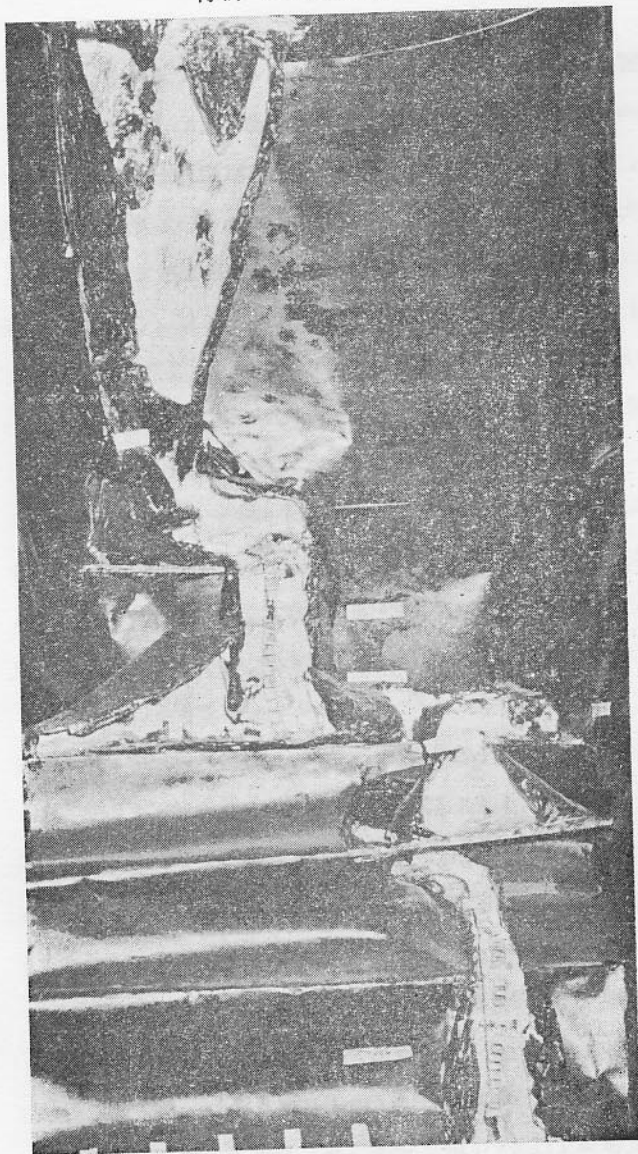
やがて3人の確保用員がやってきた。いよいよ日本最深の大洞窟といわれている青海千里洞の1番の難所を降下する。水量は少ないが、その温度は2度。すぐ上の雪溪からとけてでてきた水だ。低温のために手足がしびれる。上から10m位は直径2m位のチューブになっていて、それがひらけると、そこは大ホール・枢鳳の間の天井だ。降下しながら下の方をみる。二つのヘッドライトの明りがぼんやりとみえる。暗闇の中に2匹のホタルがさまよっているようだ。上から落ちてくる滝の水が顔にあたって冷たい。もう手足の感覚はない。その水が首筋をとおして身体の中に入ってくる。顔までがしびれてきた。オーバーハングの場所だ。身体が梯子といっしょにグルグル回転する。足がすべった。グッと2本の腕でささえる。振り落とされないように梯子にしがみつく。回転が止まると身体をふってもとにもどす。そして再び降下しはじめる。強力ライトが自分を照らしているのに気がつく。もうすぐだと思って降下速度をはやめる。まだ到着しない。1時間ぐらい梯子にぶらさがっているような気になる。

地面だ。やっと到着した。梯子から手を離してうしろを見ると、そこには広大な枢鳳の間（第Ⅲホール）が横たわっていた。地底の世界にこのような大ホールがあるのだろうか、と私は目をはるばかりであった。天井はヘッドライトではとどかず、強力ライトでもようやくとどくほどの高さだ。ちょうどおわんをかぶせたような形で弧がっている。ホールの片隅には2つの小さなアタックテントが設営されていて、そばには1本のローソクが赤々としたあたたかい色をそえてたっている。そのたった1本のローソクが寒さと緊張の連続のためにひえきった私の心をやわらげてくれる。私はそのローソクのそばにより、感覚を失った手足をあたためながら後続の者を待った。まもなく地底405mの最深部に到着したアタック隊の成功を耳にする。自分が参加したわけではないのに、自分1人が成し遂げた偉業ではないのに、過去3年における先輩たちの苦勞を考えると、喜びがこみあげてくる。

後続部員が到着するとすぐに第Ⅳホールまでの測量を開始する。ルート0をはってぐりぬけきりたったルート881をすぎて第Ⅳホールに到着すると、腹の底まで響いてくる音が地底からわきあがってくる。地下水の音ではあるが、この大洞窟に何十萬年前からすみついていて、その眠りをさまたげられた悪魔の叫び声のように聞える。なんとしても無気味な音だ。

測量の結果、第Ⅲホールは縦80m・横50～60m・高さ90mと判明した。作業がすんで洞口へあがったのはもう6時を過ぎていた。たきびの煙が冷たい空気とあたたかい空気の境目

青海千里洞模型



にきれいな層をつくっている。それがドリーネの中にたまって美しい。その向うには、もう沈みかけている太陽があたりの空を真赤に染めている。私の心がその太陽のあたたかい色に安らぎをおぼえ、除々になごんでいくのを、私ははっきりと感じることができる。そして、ついさっきまでの地底旅行を思い返す。耳もとをかすめていった落石、青い光をうけて波打っている大雪溪、しびれるように冷たかった滝の水。その時、その瞬間は苦しかったけれど、今は明るい夕日のもとでこの孤独な仲間たちにその思い出を語り、生への喜びをかみしめるだけである。そして、今この大洞窟の洞口にあるのは、赤い夕日・白い雪・青い空・暗い洞窟、そしてさわやかな思い出だけである。

11. 青海千里洞の洞内名称

梅 田 雅 宏

神秘に閉ざされた世界—未知の世界—との融合を求めてさまよい、我々は暗黒の空間—洞窟—にそれを求める。

「やった。ついにやった」。第3次調査を終え、数日後しみじみと感じる。慶媛大学が大野ヶ